第二回　東京の飯田を歩く会[１０月２３日(日)]　スケジュール
テーマ　「飯田ゆかりの江戸・明治人の足跡を訪ねて①」

午前１０時　　ＪＲ上野駅公園口改札外　集合

（午前）　　上野恩賜公園
東京芸術大学　岡倉天心像と六角堂（菱田春草・師）

天眼禅寺　　太宰春台　墓（江戸中期儒学者）
谷中霊園　　田中芳男　墓（博物学者・農学者）　乙８号10側
柳田直平　墓（大審院判事・柳田国男義父）甲６号11側
今村清之助墓（実業家　高森出身）　乙10号左８側
その他

正午　　昼食
谷中銀座周辺　食事処

（午後）　　谷中・千駄木・根津　周遊

根津神社　参拝

東京大学　赤門　安田講堂　他

午後３時　　懇親会
本郷三丁目ビストロバー「すみれや」　（田中芳男　旧邸付近）

午後５時　　現地解散
（最寄駅）　地下鉄　本郷三丁目駅　（丸の内線、大江戸線）
ＪＲ　お茶の水駅

＊小雨決行、歩きやすい服装、靴でお願いします、

太宰春台

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

太宰 春台(だざい しゅんだい、延宝8年9月14日(1680年11月5日) - 延享4年5月30日(1747年7月7日))は、江戸時代中期の儒学者・経世家。「春台」は号で、名は純、字は徳夫、通称は弥右衛門。また、紫芝園とも号した。

略歴

信濃国飯田城下生まれ。父・太宰言辰は飯田藩士であったが藩主堀親常により改易され、一家で浪人として江戸へ出て、学問を修める。元禄7年(1694年)に15歳で、但馬出石藩の松平氏に仕え、17歳の時儒学者、中野撝謙に師事し、朱子学を学ぶ。元禄13年21歳で官を辞し、以後10年の間畿内を遊学する。その間に古学派に親しみ、正徳2年(1712年)に下総生実藩の森川俊胤に再仕官。だがこれも辞し、以後生涯仕官することはなかった。正徳3年、江戸に出て荻生徂徠の門に入る。

のちに徂徠の説を批判し、『易経』を重んじて全ての事象を陰陽をもって解釈しようとした。また、征夷大将軍こそが「日本国王」であり、鎌倉・室町・江戸の3時代それぞれに別個の国家が存在したと説いた。その秀才と剛気は、孔子の弟子子路になぞらえられた。

著書に『経済録』・『聖学問答』・『弁道書』・『三王外紀』など。

墓所は東京都台東区谷中の天眼寺にあり、都の指定史跡となっている。

日本に『経済』という言葉を広めた人物でもある。

「http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%AA%E5%AE%B0%E6%98%A5%E5%8F%B0」より作成
カテゴリ: 日本の儒学者 | 経世論の人物 | 信濃国の人物 | 18世紀の学者 | 1680年生 | 1747年没

- 最終更新 2011年4月22日 (金) 08:06 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。

田中芳男(たなかよしお)　　天保9年8月9日～大正5年6月22日(1838-1916)

動植物学者・男爵。信州笠松藩漢方医田中隆三(二男)。明治期の教科書編集者田中義兼(よしかど:1841-1879)の兄。信濃国飯田(長野県飯田市)出身。少年時代に四書五経を学び、父の書蔵する翻訳書を読み西洋の知識もあった。安政3年(1856)名古屋で日本最初の理学博士号伊藤圭介に師事し、本草学(植物学)を学ぶ。吉田平九郎に動物学を学ぶ。文久元年(1861)23歳の時に伊藤圭介と共に江戸に出て、幕府の蕃書調所(ばんしょしらべしょ:後の開成所)の一施設「物産所」に勤務。慶応3年(1867)パリ万博の御用掛として派遣され、自ら作成した昆虫標本を出品した。明治元年(1868)大阪舎密局御用掛となり、同局の開設に尽力する。開成所は維新後大学南校となり、明治3年(1870)年9月新設した大学南校物産局に伊藤圭介と共に出仕。翌明治4年9月文部省の博物局、以来博物局の管轄は文部省から太政官、内務省、農商務省と所管・名称が変転し、明治15年(1882)上野に移転後の明治19年(1886)3月に博物局は消滅したが、田中芳男は継続勤務した。

慶応3年(1867)に「パリ万博」に赴いたとき、博物館の必要性を認識する。これを始めとし、再三海外に出向き、海外の農業見聞を、後に明治10年(1877)上野で開かれた「内国勧業博覧会」などを通じて国内の農家に紹介した。明治3年(1870)、町田久成がいる物産局に勤務してからは2人で、現在の国立博物館の前身、科学博物館、上野動物園の開設に貢献する。明治5年(1872)第2代国立博物館長(初代は町田久成)となるが、半年あまりで辞する。明治14年(1881)農務局長。明治16年(1883)元老院議官。明治23年(1890)貴族院議員。明治24年(1891)伊勢の神宮農業館を創立。大正4年(1915)男爵となる。翌年6月本郷金助町の自宅で没す。従二位勲一等。79歳。養子に、田中節三郎がいる。著書:「有用植物図説」など。

※　明治4年(1871)少教授として動植物色彩版画など教育出版物の編集に従事。明治5年(1872)「林娜氏植物綱目表」、「姪甘度爾列(ドカンドレ)氏植物自然分科表」の一枚刷りを作り分類体系を示す。明治8年(1875)出版の田中芳男訳纂「動物学初篇哺乳類」で「綱」「目」「科」「属」「種」の訳を用い、今日に及ぶ。そのほかの刊行物として飯沼慾斎の「増訂草木図説」、畔田翠山(くろだすいざん)の「水族志」、「古名録」など先人の稿本がある。また、「甲殻類」「爬虫類」の訳も初めて用いた。また、「田中ビワ」の創出者でもある。

※　上野の国立科学博物館には、彼の肖像画が掲げられている。

墓は、谷中霊園乙8号10側。ひょうたん横丁通りに面する。東西通りとの交差点あたり。墓標裏の経歴には享年79歳とある。正面「従二位勲一等男爵田中芳男墓」。

今村清之助

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

今村 清之助(いまむら せいのすけ、1849年3月26日(嘉永2年3月3日) - 1902年(明治35年)9月26日)は、日本の実業家。

生涯

明治時代の実業家

1849年(嘉永2年)、信濃国伊那郡出原村(現・長野県下伊那郡高森町)で生まれた。家は旧家であったが、父吉右衛門の代に家運が傾き、幼少のころから窮乏の生活を送った。清之助は兄と共に家業の農業に勤しんでいたが、かつては自家の所有地だったが今は人手に渡っている山林に、そうとは知らずに薪を拾いに行って怒鳴られた経験などから、都に出て出世することを考えていた。16歳の時、遂に意を決して家の金二朱を持ち出し家出して、横浜の平野屋市五郎商店に働き口を見つけた。平野屋の主人は何かにと面倒を見てくれたが、ある日、親類の者に見つかり、直ちに郷里に連れ戻されてしまった。

田舎での生活に我慢出来ず、19歳の年に再び金一分を懐に家を飛び出し、名古屋を経て横浜に向かった。横浜での生活は、屋台車を挽いてサザエのつぼ焼きを売り歩く貧しい毎日であったが、彼の意中は昔と変わらず出世のチャンスをいつも狙っていた。たまたま屋台の客の一人にある商館の手代がいて、清之助が信州の出身であることを知り、生糸の種紙の事情に詳しいだろうということで、館主に紹介した。

清之助はその手代と共に信州上田に行き、種紙を買い付け、成功裡に横浜に帰ってきた。館主は大変喜び、礼金として200円を清之助に渡した。彼はその金を手に直ちに郷里に帰り、今度は独自で蚕卵紙を買い付け横浜に送って、相当の儲けを得たが、相場下落にあって再び無一文の身になってしまった。

彼は1869年(明治2年)にもう一度横浜に戻ってきて、今度は横浜遊郭の入り口に洋酒のスタンドを開いた。店には外国船の船員も多数来て、彼はその頃から洋銀相場に目をつけるようになった。ある日、当時事業に失敗していた旧主平野屋に出会い、彼を援けて弗屋を開業させた。店は繁盛し、この間の1870年(明治3年)に平野屋の主人の世話で斉藤家寿をめとっている。

しばらくして平野屋と商売上の意見が対立し、彼は独立して、生糸・雑貨の才取りを始め、次第に財をなすに至った。その頃、横浜に金穀相場会社が設立され、彼はその仲買人となり、選ばれて委員となった。金と地位を得た清之助は、かねがね意図していた弗屋を開き、洋銀相場で彼の財はますます大きくなって行った。1877年(明治10年)に、東京堺町にも太物綿類と両替の店を開き、各種公債証書の定期売買を自分のところでやった。次で株式取引所の創立を計画し、1878年(明治11年)に渋沢栄一、福地源一郎と共に、日本最初の株式取引所を成立した。清之助は取引所の重役に推されたがこれを辞し、仲買人となって南茅場町に店を移して証券売買に専念した。兜町の老舗である「角丸証券」は彼の設立になるものである。

1890年(明治23年)の恐慌のあと、彼は安い株を片っ端から買い漁り、景気がよくなると利食いして、当時の金額で300万円儲けたといわれている。彼はまた、1883年(明治16年)4月から1886年(明治19年)1月まで、陸奥宗光と共に米国から英・仏・独の諸国を巡歴して、先進国の経済、文化発展の様子をつぶさに視察しており、特に米国における鉄道事業に強い興味を抱いて帰ってきた。帰国後、広く同志に呼びかけ、鉄道事業の進行に努力し、両毛鉄道をはじめ、九州・関西・参宮・山陽などの諸鉄道はすべて彼の発起によるものか、後援によって出来たものである。かくして、諸々の鉄道会社の重役となり、大株主となって、日本鉄道界の王者の地位に君臨した。そして、1888年(明治21年)12月には25万円の資本金をもって今村銀行を設立した。それから14年後の1902年(明治35年)9月26日、54歳で死去した。